

イオニアにおける傀儡僭主制

ヘロドトスのイオニア反乱の評価 (Hdt.6.1.) : アリスタゴラスとヒスティアイオスの利己的な動機から起こした愚かな行い
動機は前者にとっては保身であり、後者にとってはスーサでの生活に終止符を打って祖国に戻る事 (Hdt.5.35.)

研究者たち : 個人の反逆に留まらず、反乱には大衆的基盤がある
個人的な利己主義が動機であったというヘロドトスには否定的
ペルシアがイオニア人たちに強制した僭主制こそが反乱の原因であり、イオニア人たちはその僭主制に強い不満を抱いていた (E.g. Blamir, 146 : イオニア人の不満は第一義的に時代遅れな僭主制をペルシアが支持している事にあった)
スキュティア遠征でのヒスティアイオスの言葉 : 「ダレイオスの支配権が倒されてしまったら、ミレトス人の間における自分も他の如何なる者も支配していく事はできない tes Dareiou de dynamios katairetheises oute autos Milesion hoios te esesthai archein oute allon oudena oudamon 」 (Hdt.4.137.)

ナクソス遠征に従軍した僭主たちが逮捕された事 (Hdt.5.37.) など
ペルシアはその帝国統治の一環として僭主制をギリシア人従属都市に課していた
アンドリュース : 「ペルシアが任命した僭主を通してギリシア諸都市を統制するペルシアのシステムは単純なものであって長い説明は必要ではない」 (A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, (London 1969), 123-124.)

ペルシアによるギリシア人統治の手段としての僭主制は当然の事として研究者たちに受け入れられてきた。

多数説 : イオニア反乱が僭主の逮捕と僭主制の廃止から始まった事から、時代遅れとなった僭主制に対するイオニアの民衆の反感が動機

バーン (A. R. Burn, *Persia and the Greeks*, (Stanford 1984^{2nd} ed.), chp. X, 193-220.) : 重い貢税負担 (193.) と僭主を通じての支配に対する苛立ち (193~195.) が原因

ハリス (G. Harris, *Ionia under Persia* (diss. Evanston, Illinois. 1971)) : 僭主制に対する民衆の憎悪が原因 (190.)

その憎悪を掻き立てたのがダレイオスによる帝国の再編成
総督制 (94-96.)、僭主の設置 (96-104.)、貢税の徴収 (104-108.)、トラキアの併合 (108.) と貴金属の退蔵 (106.) による銀の流通抑制、銀の流通抑制によるスタグネーション (経済不振) (108.)、兵員の動員 (108-114.) など

「様々な古代帝国と同じように、ペルシア帝国がかなりうまく機能していた事は認めなければならぬ。それにペルシア政府が古代の基準から見て驚くほど人道的であったことは疑いがない。しかしその優れた局面を認めるとしても、ペルシアの体制が多くの新しい不慣れな負担をイオニア人に課したのであった。そしてそれが大イオニア反乱に結果する反乱への雰囲気

作り出すのに累積的効果を有していた。」(114.)

ジョージス (P. Georgis, "Persian Ionia under Darius: The Revolt reconsidered," *Hist.*

49(2000), 1-39.) : 僭主制こそがイオニア反乱の原因であったが、反ペルシアの意思は希薄

王朝の篡奪者であったダレイオスは前代の王朝と同一視される人物を一掃し自らに忠実な人物に置き換えていった (20.)

その為にギリシア人たちの文化を尊重しつつ小アジアを統治していたオロイテスのような人々は更迭され、経験を持たず従属民に対して高圧的な態度を取るアルタフェルネスやメガバテスのような人物に置き換えられた (21.)

ダレイオスはイオニア内部の利害関係とは関わり無くペルシアに奉仕させるために組織的に僭主を置いていった。

これらの僭主の主たる任務：貢税の徴収と軍役の履行→僭主は大衆的な基盤を欠き、イオニア人たちの恨みを買っていた

経済的繁栄による自由を希求する階層の増加 (22) や僭主たちのペルシア人を真似た尊大なスタイルに対する人々の反感 (23)

それにも関わらずイオニア人はペルシアとの戦争を望んではいなかった

ペルシアもその海軍力の半分を担うイオニア人との戦争を望んではいなかった
話し合いによる解決の可能性が双方ともにあった

この可能性を打ち砕きイオニア人とペルシア帝国との全面戦争を不可避にしてしまったのはアテナイとエレクトリアからの援軍

キーナスト (D. Kienast, 'Bemerkungen zum jonischen Aufstand und zur Rolle des Artaphernes', *Hist.* 51(2002), 1-31.) : ジョージスに異議

ペルシアからの解放を主たる目的

僭主の追放だけが目的だったのではない (19.)

最初から反ペルシアの志向が強かった事はキーナストの主張する通り

その原因はペルシアの支配がこれまでに無く過酷であったとかそういう事ではなく、ギリシア人はナクソス遠征でペルシア人と遠征を共にする事で初めてペルシアの厳格な刑法と官僚制を経験する事になり、その事が貢税の徴収と共にペルシアに対する反感を掻き立てた (20.)

四か月にも及ぶ攻城戦の中でイオニア人将兵をバンダカ (奴隷) として扱うペルシア人将兵との無数の衝突が将兵の間に反ペルシア感情を醸成

キーナストが見落としている事実：ダレイオスのスキュティア遠征の際に既にイオニアのギリシア人の間で「ペルシアの支配からの解放」が議論されていたとジョージスを批判するが (19.)、この「解放」を提案し議論したのは遠征軍に参加していた僭主たちであった (Hdt.4.138.)

キプロスで反乱を指導したサラミスのオネシロス：庶民ではない (Hdt.5.104)

カリアで離反を指導したのは「ペルシア人によって任命されたのではない地方の権力者」であった（Kienast, 19 : Hdt.5.118 においてカリア人の会合の席で背水の陣をひいて進攻するペルシア軍と決戦すべし、と説いたのはマウソロスであった。この人物はキリキア王の娘婿）

つまりペルシアからの離反を提唱したのも、反乱を指導したのも「外国支配の代弁者」（19.）とみなされる「都市の支配者」（19.）

ペルシアの宗主権と僭主制を同等視してイオニア反乱の原因を求める伝統的な評価の枠組みは事実の面で自己矛盾をきたす

後世の視角からの議論：僭主がギリシア人の中で著しく不評となっていて、民族の利害を裏切る存在となっていた。このようなギリシア人の中で不評な僭主を帝国統治のために利用したペルシアの支配はギリシア人の自由と自治を抑圧する存在と映ったためにイオニア人たちは自由と自治を求めて反乱へと踏み切った

同時期シケリアのギリシア諸都市をカルタゴの脅威から防衛したのがシケリアの僭主たちであった、ということが都合よく無視されている（Cf. G. B. Grundy, *The great Persian War and its Preliminaries*, (London 1901) , 87.）

このような視点はデロス同盟時代にアテナイから発信された「反僭主」と「民主政」のイデオロギーを反映

アリストゴラスがミュウスの集結中であつた艦隊で提案した「イソノミエ」という言葉の過大評価に基づく

キーナスト：僭主の逮捕はイアタゴラスによって彼が乗艦している艦の中で行われたのであって、将兵たちの目の前で行われたのではない（Kienast, 9.）

重要なのは僭主の追放によってイオニアの諸都市における「貴族」が圧倒的な影響力を行使する旧来の権力構造は影響を受けていない事（9.）

アリストゴラスはイソノミエ、即ち民衆に一定の発言権を認める制度を導入したが、貴族たちの支配的な地位を危くする事は無かった。

キーナストによるとイソノミエによって体现される国家制度は貴族制的な構造を有していて、貴族の決定的な影響力を殺ぐものではなかった（9-10, n.32.）

僭主は追放され、彼らの財産は没収されたが、僭主の同情者は広範囲に残されていた（10, n.34.）

キーナストの見解はイソノミエから類推されてきたイオニア反乱に見られる民衆革命的な要素を小さく評価する学説につながる

民衆の反乱という伝統的な見解に対して古くはグランディーが（G. B. Grundy, chp. 3, 79-144.）、新しくはヴァルターやウッドが異論を展開

グランディー：アジアのギリシア人の反乱はナクソス遠征の失敗のあと急に浮上してきたものではなく、既にスキュティア遠征時にギリシア人僭主たちのあいだで醸成されていた（84.）

反乱計画の中心にいたのがアリストゴラスであった (84.)

ペルシアの後押しによって権力を維持している僭主たちがどうしてペルシアからの離反を長年にわたって計画していたのか、その理由がグランディエーからは明らかとならない

とりわけ、「ペルシア人はその時代にあって例外的に忍耐と寛大さの政策に従ったように思われる」(42.) と評価しているのに

ヴァルター (U. Walter, "Herodotus und die Ursachen des Ionischen Aufstandes,"

*Hist.*42 (1993) 257-278.) : イオニア反乱はイオニア人の反乱でなくイオニアの貴族社会の構造的問題に原因

ヴァルターはアルカイック期アテナイの「貴族制」についてのシュタールの説を論の根底 (M. Stahl, *Arisokraten und Tyrannen im archaischen Athens*, (Stuttgart 1987).)

小さな血縁集団に組み込まれ比較的小規模な土地資産に依存する貴族のオイコス、ポリスという狭い枠の中で絶えざる競争の中に置かれていた。政治的敗者は資産を没収され、勝者によって被った恥辱を晴らすために亡命という手段を取った。外部の支援によって僭主の地位を手に入れる者もいたが、その地位は安定したものではなく復讐心に燃える競争者によって脅かされていた (Walter, 275. n.64.)

ポリス内部での内訌とペルシア支配とは密接な関係 (275.)

ミレトスにおけるイオニア反乱の勃発をこの都市における一種の内訌状態の結果として説明する事は (277.)

イオニア反乱の原因を少なくともミレトスにおいて「商業的利益」とか「真正のギリシア的自由への衝動」のような非常に不十分なカテゴリーの中に捜し求められるべきではなく、原因は恐らく組織化されていない、競争倫理の影響を受けている貴族層の内部構造やこの構造の結果としての内訌の中に見出されるべきものである (278.)

ハリス (G. Harris, *Ionia under Persia: 547-477B.C.* (diss. Evanston, Illinois) : アリストゴラスの行動は彼単独のものではなく、その背後にミレトスの寡頭派勢力の意思 (101-102.)

これは見過ごす事の出来ない指摘

ダレイオスは富裕者層、寡頭派の人々に力点を置きそのような人々の中から僭主を任命して後援するという形でイオニア諸都市の支配権をこの人々に委ねた (101.)

ミレトスの寡頭派体制が課せられたのは五二〇年頃の事であり、ミレトスの僭主ヒスティアイオスはこのグループの出身者であった (Ibid.)

ハリスの指摘→ペルシア支配下のイオニアの僭主制を評価する上で極めて重要イオニアの僭主制がある程度ペルシア王や総督と僭主の個人的な関係にのみ基盤

を有しているのではなく、それぞれの都市に比較的強固なそして広範囲な支持基盤を有していたと想定する可能性

ダレイオスはイオニア支配のためのシステムとして僭主制を採用し強制したのだろうか

小アジア西岸に現れる僭主は功績に対する恩賞によって人々の忠誠を集めていこうとするダレイオスの意思の産物

小アジア西岸に現れる僭主制はペルシア帝国のシステムだとする必要はない。これらの僭主は何らかの形でダレイオスに顕著な功績を上げた人物であって、その功に報いるべく恩賞として僭主の座を与えられた人々であった。

イオニアにおける画一的な僭主制の広がりについての疑問

何故ミュウスで逮捕された僭主の中に一人としてイオニアの僭主の名前が列挙されていなかったのか (Hdt.5.37.)

何故カリア人僭主とアイオリス人の僭主の名前だけが具体的に言及され、イオニア人の僭主が「その他大勢 *allous sychnous*」の範疇に入ってしまうのか

そしてイオニアの僭主を「その他大勢」の中に含める事でイオニアの全ての都市において僭主制が崩壊したと言い切れるのか。

ミュウスの集会の後、各都市に引き渡された僭主の多くが処刑される事なく釈放され、亡命を許されたのは何故なのか

彼等がサルディアスのペルシア人総督の許に逃亡する事は自明の事柄であったのに

ジョージス (P. B. Georgis, "Persian Ionia under Darius: The Revolt reconsidered," *Hist.* 49 (2000), 1-39.) : この事こそイオニア人にはペルシアと戦争をするつもりは無かった事を示す証拠 (24.)

ペルシアの庇護を受けているこれらの僭主を処刑する事はペルシアの報復を招く事となる

ジョージスに対する批判：これは逆

ペルシアの報復を恐れて処罰を抑制したのではなく、僭主に対する不満、怨恨が強くなかったから

各都市においてクーデタに加担した人々はこの時まで僭主を支えてきた党派を構成してきた人々であった

その中にはイアタゴラスのように僭主の親族である人々も混じっていた

僭主を処刑したミュティレネに対してペルシアがそのような報復を行ったとは記されていない

この点でジョージスの論を認める事はできない。

要は、当時のイオニア人の間にアテナイでの様に強い反僭主感情が市民たちの間に横溢していなかった事を物語っている。

それに無機的な民衆が僭主の逮捕と「イソノミエ」の制定において積極的に関わったと

いうよりは、この一連の出来事が極めて短期間のうちに広範囲に生じた事はアリスト
ゴラスとその党派の人々がイオニア、更には小アジア西岸に築いてきたある種のネッ
トワークを通じてであった事を考えさせる。

幸いナクソス遠征に参加していた艦隊はそのネットワークによって集結していたので、各都
市の主だった人々の了解を取り付ける事はそれほど困難ではなかった
つまり、「イソノミエ」の導入によって僭主は居なくなったけれども、都市内部の権力構造に
は変化はなかった